紹介と批評

井上一明『ジンバブウェの政治と社会――変動する政治と人々の暮らし』

はじめに

本書は、一九八九年から二〇一八年まで慶應義塾大学法学部政治学科で教壇に立ち、ジンバブウェの政治と社会を研究した著者による研究の集大成である。本書は、著者が一九九〇年代後半から二〇一〇年代後半にかけてジンバブウェで行った現地調査をもとにしている。序論と全七章で構成されており、各章が既出の論考を大幅に修正したものであり、論文集の性格が強い。

本書を読んで驚かされるのは研究対象の広さである。ジンバブウェの政治体制というマクロレベルから、マショナランド・セントラル州マゾエ地方チウェシェ地区チスヴィ村というミクロレベルまでが対象となっている。研究アプローチについても、政治学的なアプローチがとられている章があれば、文化人類学的なアプローチがとられている章もある。そして、ジンバブウェの歴史や現状を解説しているだけではなく、幅広い学問分野の理論を引きながら仮説の検証を行っている。本書には、著者がここまで大きく異なるテーマの研究を行ってきた理由は明示されていない。しかし、著者の最大の関心は国家にあり、国家が社会にどのような影響を与え、社会からどのような影響を受けているのかを理解するために、国政だけではなく、農村部まで分析の対象を広げたのではないかと評者は想像している。政治と社会に見られる様々な現象を多角的に掘り下げることにより、ジンバブウェという国をより深く理解しようとする著者の確固とした姿勢と思い入れが感じられる。

本稿では、本書の概要をまとめた後、本書の学術的貢献を検討し、他のサハラ以南アフリカ（以下、アフリカ）諸国への適用可能性と他の理論との関連性を考察する。

本書の概要

本書の序論では、国の政治が社会構造を反映していることをふまえ、ジンバブウェの社会構造を考察するための二つの概念が紹介されている。一つめはゲマインシャフトと

ゲゼルシャフト、二つめはパトロン・クライエントである。ジンバブウェの人々は、パトロン・クライエント関係にもとづくゲマインシャフト的な社会構造のなかで生活しており、ジンバブウェ政治はこの構造の影響を受けているという。また、この社会構造は時代の流れのなかで変化しており、人々は自分の利益を得るために取捨選択を繰り返している。序章は、これをジンバブウェの政治と社会を理解するための枠組みとして提示した後、各章を紹介している。

第1章と第2章は、ジンバブウェの政治体制について論じている。「ZANU–PFと政治体制の変貌」と題する第1章では、権威主義体制の国において、どのような条件下で政治変動が発生するのかという問いを、ジンバブウェが独立した一九八〇年から連立政権が発足した二〇〇八年までの大統領選挙及び議会選挙の分析を通じて検討している。その結果、選挙操作が行われているとしても選挙が定期的に実施される国においては、（1）持続可能な組織としての野党が存在している、（2）野党が外部からの支援を受けている、（3）有権者が「飢え」の状態に追い込まれているという三つの条件が揃うと、政治変動が発生すると論じている。ジンバブウェにおける政治変動は、二〇〇八年の議会選挙における与党の敗北と連立政権の樹立を指す。

続く第2章は「クレプトクラシーの政治――2000～2008年」と題し、ジンバブウェにおけるクレプトクラシー体制のメカニズムを分析している。ジンバブウェはロバート・ムガベの個人独裁の国であったと見なされることが多いが、本章はムガベではなく治安部門を含む支配体制に焦点をあてているのが特徴である。クレプトクラシー体制は、「国家が個人ないしは小集団の利益のために統制・運用され、彼らは権力を行使することによって社会的資源の大部分を自分たちのために転用する体制」（二三頁）である。本章は、この体制を支えているのは、「正当な物理的暴力装置」（二五頁）である軍や警察、刑務機関などの治安部門であり、二〇〇〇年代のジンバブウェにおけるクレプトクラシー体制においても治安部門が重要な役割を担っていたことを指摘している。

第3章は「社会と国家に翻弄される官僚制」と題し、なぜアフリカ諸国の官僚制が政策目標を効果的に達成できないのかを、ジンバブウェを事例として検討している。具体的には、官僚制はゲゼルシャフトを前提としているが、ジンバブウェの社会はゲマインシャフトで特徴づけられており、パトロン・クライエント関係の影響を受けて、官僚制が適切に機能しないと論じている。

第4章は「ハラレの人々と政治」と題し、ジンバブウェの首都ハラレに住む人々が一九九〇年代後半以降、抗議行動によって生活条件の改善を政府に訴えてきたことに着目し、都市の住民が抗議行動を起こすのはなぜかを分析している。本章は、農村の人々と比べて、都市の人々は中央・地方政府から提供されるサービスへの依存度が高いため、政府の機能不全によって十分なサービスが提供されない状況になると、抗議行動を起こしやすいと述べている。この背景には、ジンバブウェでは、与党ZANU-PFの支持基盤が農村部にあり、都市部の有権者が政府に不満をもっても、選挙を通じた政権交代の実現が難しいという側面もある。そして、一九九〇年代後半、ハラレに住む人々の労働条件の改善のためにできた組織が、主要野党のMDC結成へとつながったことを示している。

第5章と第6章は、農村部について分析している。第5章は「チウェシェ共同体地域における二重の制度」と題し、国家が人と財産の安全を保障するという最も重要な役割を十分に果たせない代わりに、社会がこの役割を果たす能力を持つ場合、人々の国家への依存が弱まるという仮説の妥当性を検証している。例えば、チウェシェ地区チスヴィ村では、土地の分配と利用に関してフォーマルな制度とインフォーマルな制度が併存しているが、そこに暮らす人々は、自身の生存と利益の最大化という観点から、二つの制度を選択的に使い分けているという。それぞれの制度を実施するエージェントは、分業によって二重の制度の矛盾を避け、人々はこの分業を十分に理解しているというのである。そしてフォーマルな制度が機能していない状況では、人々は国家から離反し、国家は弱体化すると論じている。

第6章は「チスヴィ村における共同牧草地の悲劇と『フロンティア』の出現」と題し、コモンズ（共有財）の管理や運営をめぐる問題について考察している。具体的には一九九〇年代から二〇一〇年代のチスヴィ村の共同牧草地が分析対象となっている。チスヴィ村には三つの共同牧草地があるが、そのうちの一つは一九九〇年代後半以降、裕福な村人の農地拡大と牛の過剰放牧によって消滅の危機に瀕した。しかし、政府の土地改革政策によって、村人の一部が牛を連れて村の外にある旧白人農園へ入植したため、共同牧草地の牛の数が減少し、牧草が次第に回復したという。一方、別の牧草地は二〇〇〇年代後半から、都市移住後に村に帰ってきた人々が宅地化したことが一因となり、事実上、消滅してしまった。本章は、都市部への出稼ぎ労働はさらに加速し、帰村した人々による宅地や農地の拡大によ

って共同牧草地はいずれ消滅してしまうだろうと予想している。それを防ぐためには、共同牧草地保全のための法を厳格に施行し、保全による利益を村人たちに広く認識させることが必要であると述べている。

第7章は「『暴君』と呼ばれた世界最高齢の大統領ムガベの退場」と題し、独裁者としてのムガベ像に疑問を呈する。本章は、独立以降のジンバブウェにおける与党ZANU–PFの政治力学のなかにムガベを位置づけ、第2章同様、彼の支配体制が単純な個人支配ではなかったことを指摘している。具体的には、一九九〇年代までZANU–PF内が分裂せずにムガベの支配に従っていたのは、党の副党首を務めたサイモン・ムゼンダの優れた調整能力によるものであったという。二〇〇三年のムゼンダ死去後、党内には、ムナンガグワ現大統領率いる派閥、ムジュル副大統領の派閥、さらに公安関係者の派閥が対立するようになり、ムガベは三者間のバランスをうまくとることができなかった。やがて、ムジュルはムガベ失脚を企てたとして副大統領を解任され、ムガンナグワが副大統領に就任した一方で、ムジュル派の穴を埋めるように、大統領夫人のグレース・ムガベが率い、若手起業家で構成される派閥が生まれた。やがてムガベはグレース派を重用するようになり、二〇一七年一一月にムガンナグワを副大統領から解任したが、その翌週、軍によるクーデターが発生した。その後、議会における大統領弾劾決議案の成立直前に、ムガベは大統領を辞任したのである。本章には書かれていないが、第2章に関連づけるならば、軍という治安部門が反旗を翻し、ムガベを頂点とするクレプトクラシー体制が崩壊したということである。

本書の学術的貢献

本稿の冒頭で述べたように、本書はジンバブウェの政治体制から村まで、幅広いレベルの分析を行っている。また、研究アプローチや先行研究という観点からも政治学に位置づけられる章もあれば、社会学や文化人類学に関連する章もあり、それぞれに学術的な示唆が含まれている。例えば、第1章は、権威主義体制における政治変動の要因に関する仮説を提示しており、第6章はローカル・コモンズに関する議論に有益な事例を提供している。本書全体としては、ジンバブウェという特定の国を分析しているため、地域研究に位置づけられるだろう。国政から農村までの異なるレベルを、異なるアプローチで調査し、分析し続けるのは並大抵のことではなく、本書は地域研究の成果の見本となる

ものである。

他方で、本書には終章がなく、ジンバブウェの政治と社会に関する総論にあたる部分がない。パトロン・クライエント関係にもとづくゲマインシャフト的な社会構造が政治に反映しているという序論の説明は、第3章の官僚制の分析に明確に表れているが、その他の章では政治と社会がどのように影響しあっているのかは必ずしも示されていない。序論に、「定点観測的な地域の考察にもとづいて、『ジンバブウェにおける』という一般化がどこまで妥当性を有するものであるかは、慎重を期した議論が必要で」（i頁）あると書かれており、著者は村レベルの分析結果を、国レベルの議論につなげることを避けていたのかもしれない。実際、本書の農村の分析はショナ人社会に限定されており、ジンバブウェの別の主要民族であるンデベレ人の社会が含まれていないことからも、農村部について一般化することは難しいだろう。しかし、ジンバブウェの農村社会の分析（第5章及び第6章）が、政治体制に関する分析（とりわけ第2章及び第7章）にどのような影響を与えたのかについて、著者の見識の教示があれば、後進の地域研究者にとって有意義ではないかと思われる。

他のサハラ以南アフリカ諸国への適用可能性と他の理論との関連性

次に本書の議論の他のアフリカ諸国への適用可能性と他の理論との関連性について考察したい。評者の専門である政治学に関連して、第1章と第5章を取り上げる。

第1章では、権威主義体制における政治変動に関する仮説が提示されており、アフリカや他の発展途上地域の権威主義体制における政治変動の有無に適用できるかを検討することができよう。ジンバブウェ同様、長年、大統領が変わらないアフリカ諸国の多く（例えば、カメルーン、赤道ギニア、ウガンダ）では、選挙を通じた政権交代や連立政権の樹立は生じていない。例外として、ガンビアでは二〇一六年の大統領選挙及び議会選挙において、二二年間、独裁体制を敷いたジャメ大統領と彼の率いる与党が敗北し、政権交代が実現した。ＢＢＣの記事では、政権交代の要因として、野党の統一、若者や女性による野党支持、選挙における投票所での即時開票に加え、ジャメが軍の支持を失ったことが挙げられている（BBC 2016）。より詳細な分析が必要であるが、ガンビアにおける政権交代の要因は、本書が提示した政治変動の三つの条件（持続的な野党の存在、外部からの野党支援、有権者の「飢え」とはやや異

なるのかもしれない。

大統領が定期的に交代しつつ、同じ与党が政権を維持する一党優位体制の国はどうだろうか。例えば、モザンビークには、南アフリカの支援を受けたRENAMOという持続的な野党が存在するため、最初の二つの条件は揃っている。しかし、近年、抗議活動が活発化しているものの選挙を通じた政治変動は発生していない（例えば、網中 二〇二六）。モザンビークには、政治変動の三つめの条件である有権者の「飢え」が欠けているのだろうか。一方、ガンビア、モザンビークを含め、権威主義体制の国における選挙の実施状況を見ると、さまざまな選挙操作が行われてきており、それによって現職大統領と与党が「勝利」し続けていることがわかる。ジンバブウェの二〇〇八年選挙では、ムガベ政権が与野党の得票率の予測を誤り、その結果、選挙操作が不十分であったことが政治変動の背景にあるのではないだろうか。本書には、ムガベが再選し、ZANU–PFが勝利した二〇一三年大統領選挙及び議会選挙は自由・公正な選挙ではなかったと書かれているが（四五頁）、二〇〇八年選挙の経験を経て、ムガベ政権が選挙操作を一層強化した可能性が考えられる。ガンビアで政権交代が起きた二〇一六年選挙においては投票所での即時開票が導入され、それ以前の選挙よりも選挙操作が困難になっていた。したがって、権威主義体制における選挙を通じた政治変動については、本書が提示した三つの条件に加え、選挙操作の程度を考慮する必要があると思われる。また、ガンビアの経験をふまえると、本書の第2章でも焦点があてられていた政軍関係の変化も注目に値する。

第5章では、農村部におけるフォーマルな制度とインフォーマルな制度が分析されているが、ラテンアメリカ諸国を事例にヘルムケら（Helmke and Levitsky 2016）が提案し、チーズマン（Cheeseman 2018）がアフリカ諸国に適用したインフォーマルな制度の四類型（図1）を用いて整理することもできるだろう。第5章では複数の地方や村が分析されているが、その中で、チスヴィ村ではフォーマルな制度が機能しており、インフォーマルな制度はフォーマルな制度と対立することなく併存しているという。したがって、チスヴィ村のインフォーマルな制度は四類型の「補完的（Complementary）」にあてはまる。一方、マトボ地方の共同体地域では、土地の利用と配分に関してフォーマルな制度とインフォーマルな制度の対立が見られ、その結果、共同体地域の秩序が失われている。マトボ地方の土地に関するインフォーマルな制度は四類型の「競争的

（Competitive）」とみなせるだろう（Helmke and Levitsky 2016: 13–14）。

図1　インフォーマルな制度の4類型

		フォーマルな制度（Formal Institutions）	
		効果的（Effective）	非効果的（Ineffective）
結果（Outcome）	収斂（Convergent）	補完的（Complementary）	代替的（Substitutive）
	散逸（Divergent）	順応的（Accomodating）	競争的（Competitive）

出典：Cheeseman（2018: 367）Figure 15.1 に評者が和訳を追加して作成。

これらの分類から、ヘルムケらやチーズマンも論じているように、アフリカ諸国を含む発展途上国においては、インフォーマルな制度の性質が多様であると言える。本書の第5章は、国家がフォーマルな制度を通じて人々の生命と財産を保証し、共同体地域における生存を確保する役割を担うことができない場合、人々は国家から離反し、国家は弱体化して、国家と社会の乖離が発生すると結論づけている（一三〇頁）。実際には、一か国のなかでもフォーマルな制度とインフォーマルな制度の役割や関係は多様であり、様々な制度の調査と比較分析を積み重ねることによって、国家と社会の関係についての議論はさらに深まるのではないだろうか。

以上、第1章の他のアフリカ諸国への適用可能性、第5章の他の理論との関連性について考察を試みた。本書はジンバブウェを対象とした地域研究の長年の成果を凝縮したものであり、本節で取り上げた二つの章の他にも、政治学、社会学あるいは文化人類学の主要なテーマについて示唆に富む論考が多数所収されている。アフリカ政治研究者はもちろんのこと、他の発展途上地域の政治や社会に関心を持つ研究者や大学生にも一読を推奨したい。

〈参考文献〉

網中昭世「政党政治と抗議運動」、武内進一編『アフリカの国家建設――自分たちの国をつくる』、白水社、二〇二六年.

BBC (2016) "How Gambia's Yahya Jammeh Lost His Grip on Power" December 10. https://www.bbc.com/news/world-africa-38249924.

Cheeseman, Nic, ed. (2018) *Institutions and Democracy in*

Africa: How the Rules of the Game Shape Political Developments. Cambridge: Cambridge University Press.

Helmke, Gretchen and Steven Levitsky, eds.（2006）*Informal Institutions and Democracy: Lessons from Latin America*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

（慶應義塾大学法学研究会、二〇二五年）

粒良麻知子